

沿岸地域の復興を支える港町の染工場

--- 石巻市・山田染工場 ---

高野岳彦

1. 江戸時代から続く染工場

2013年8月上旬の平日午後、三陸自動車道のICから石巻中心部に続くバイパスの交通量は、被災地復興に向かうトラックも混じってかなり多い。しかしそこから左折して中心市街地につながる幹線道の交通量は少なく、がらんとした交差点の信号の赤がやけに長く感じる。あっけなく数分のうちに中心部に入ると、北上川べりのかつての繁華街は津波の浸水をうけて更地になったり、建物は残っても営業店はほとんどない。石巻は近世以来、北上川河口の港湾都市で、水産業の一大水揚・出港基地であり、県東部の行政・経済の拠点都市でもあった。その中心部の復興は、被災から2年半たってもなお、容易ならざる状況にあるように見受けられた。

その中心商店街から1本北の裏通りから小路に入った住宅街に、夫婦で操業する山田染工場がある。町名は千石町で、北上川の河畔にあって舟運で栄えた住吉町の内陸側にあたる。山田家の敷地の隣には、川村孫兵衛が石巻の町場を割り出す際に用いた縄を祀る縄張稲荷社(写真1)がある。かつては神社の前まで北上川から水路が引かれていたという。



写真1 縄張社

鳥居の左にある案内板には神社の由緒と、北上川改修を指揮した川村孫兵衛重吉の事績が解説されている。

山田家の敷地内にある氏神様の脇の草むらにある小さな石碑に「文久」(1861~63年)の元号が刻まれており、同家に伝わる家系図ではその文久元年に死去した御先祖までたどられており、現当主はそこから数えて七代目になる。今は人通りもあまりない山田家の界限には、海業とともに歩んできた港町の長い歴史が確かに伝えられている。

港町石巻の染物屋は、かつては山田家の向かいに「紋屋」の看板を今も残す親戚にあたる家があり、他に2件の染物屋があった。しかしそのうちの1件は現当主の幼少時には廃業し、他も10年前までに廃業した。今では山田染工場が石巻で唯一の染工場であり、旧市内、女川、雄勝、牡鹿半島を含む石巻都市圏内の染物需要を引き受けてきた。

2. 被災から復旧へ

2011年3月11日午後、石巻は震度6強の激震に続いて大津波に襲われ、北上川河口の低平な平野に広がる市街地は大被害を受けた。中心市街地には1~3mの津波が押し寄せ、地盤の低い海寄りの商店街は壊滅状態となった。やや内陸側にある山田家でも、母屋の床上20~30センチまで浸水した。母屋に隣接する染物の作業舎も、側壁が揺れで崩れ落ちて津波が通り抜ける状態となり、また1m近い地盤沈下の影響で土台が沈んで、小屋組みの鉄骨が土台から浮き上がった状態となった。染色に必要な設備と資材もすべて破壊・流失した。

床上浸水した母屋1階の復旧に6月までかかり、その後7・8月にかけて染工場の修復と作業に必要な資・機材を回復させた。それには、絵柄デザイン用PC、型紙出力用のプロッター、染料、ハケ、布地など200万円を要した。そして震災半年後の9月、山田染工場は再開を果たした。

3. 染物の種類と受注

山田染工場が受注する染物の種類は、旗、幟、半纏、のれん、手ぬぐいなどで、旗には漁船の大漁旗や社旗があり、いずれもそれを掲げる人や団体にとって、震災後の活動再開のまさに「旗印」になるものばかりである。すなわちこの場合の染物とは、事業や行事、集団のシンボルなのであり、そこには発注者や使用者の願いと心意気が込められている。染物屋なくして復興の気概は具現化されないのである。

山田染工場へのこうした染物の受注は、震災の直後からあったといい、9月の工場再開までは外注で対応するしかなかったという。染工場の再開後は、みんなが待ち望んでいたかのように、平年の2倍のペースでの受注が続いた。染工場を再開した2011年9月といえば、復興交付金の執行が本格化して事業や漁業の再開がようやく増え始めた時期でもあった。

受注品の6割を占めるのが旗で、その多くが漁船の「大漁旗」というが、再開当初に目立ったのは神社の旗や幟であり、大漁旗が増えるのは2011年の暮れの頃からであった。確かにこの時期は、共同利用漁船補助を受けた新造船が各地の漁港に少しずつ納入され始めた時期であった。

2012年に入ると受注はさらに増えて、以後、筆者訪問時の2013年8月まで、休みなしの状態が2年間も続くことになった。筆者の取材の最初の依頼も、復興過程における染物の象徴性と重要性に気づいた2012年10月であったが、山田氏によれば、当時は最も多忙を極めた状態で、雑誌・新聞の取材要請を全部断らざるをえなかったとのことであった。

4. 大漁旗の制作工程

山田氏からのご教示によれば、受注の過半を占める大漁旗の制作の流れは次のようである：

- ①発注者の希望をふまえて絵柄を決める
- ②PC上で絵柄をデザインして型紙を出力
- ③型紙を頼りに、絵柄の外形に沿って糊付け
- ④糊で枠どられた絵柄の内側に染料で彩色
- ⑤水洗いして糊を落とす
- ⑦乾燥

⑧縫製—ハトメ付け—アイロンかけ

このうち、水洗いまでは山田氏、縫製以降は山田氏の妻が担当する。

制作工程で出そうな音といえば、水洗いの音と縫製のミシン音ぐらいで、それも戸外に響くようなものではなく、工程の多くは黙々とした中で進められる。港町の中心市街地の閑静な一角で、被災からの再起を期す人々の復興の「旗印」が、人知れず制作されている。

大漁旗に描かれるのは、宝船、恵比寿、銭(小判)、サンゴ、エビ、タイ、富士山、日光(日の出)といった祝儀の図柄群であり、また威勢のよいカツオも描かれる。これらの絵柄のパーツを、依頼主の要望があるときはそれをふまえ、また複数セットの依頼の場合は同じような組み合わせにならないように考慮して決める。この際、遠方から視認できるよう細かすぎる絵柄は避け、配色も赤、青、黄、緑、黒といった原色の染料を組み合わせで行う。1つの旗に使用する色は最大でも5色という。

絵柄の上か下には、依頼主の希望に応じて船名、船主名、贈呈者名の黒文字が、鮮やかな図柄に負けない威勢のいい太字体で描き入れられる。

旗のサイズは、最も多い標準タイプが1m×1.5mで、大型の旋網船などでは1.8m×2.7mの大判のものとなり、2.25m×3.6mが最大サイズである。

旗の生地は木綿で、光沢のあるブロード生地がよく用いられ、その完成品は目の覚めるような原色の鮮やかな色彩を放つ。

5. 大漁旗にまつわる慣行

船体や航行技術が向上した現代では操業の安全性は「板子一枚」の和船の時代に比べて飛躍的に高まっているが、それでも特に天候に左右されやすい小・中型漁船の場合は今も危険と隣りあわせであることに変わりはない。そのため、大漁旗にまつわる慣行は今もみられるという。

例えば絵柄では「乗組員一同」の文字を波の下に置かないようにしたり、「四」や「九」の文字が忌避されるのは今も変わりなく、そもそも「四」や「九」を船名とする船は今もないという。

製品の納入日・受け取り日もまた縁起を重視する慣行があり、基本的に「大安」が望ましく、先勝の日は午前中、先負の日なら午後が良く、友引の日は忌避されるという。また、お盆の時期は余計なことはやらないで先祖を敬うという風習が残り、同時期には家の新築や船の新造も減って、この時期を指定した染物の受注も減るという。この調査の訪問日として8月7日が指定されたのは、こうした事情によるものであったという。



写真2 糊で縁取られた絵柄と文字に染料で着色



写真3 完成品した大漁旗

遠くから視認しやすいまばゆいばかりの彩色。糊を洗い落した後が白い縁になって図柄を引き立てる



写真4 文字の型紙



写真5 獅子舞団体の幟



写真6 獅子舞の衣装の縫製。獅子の体部分になる(右写真)



写真7 漁師の大漁半纏

(いずれも2013年8月7日、筆者撮影)